

第7回 ふじみ新ごみ処理施設整備市民検討会 会議録（要旨）

- 1 開催日時 平成19年6月28日（木）19時から21時30分
- 2 開催場所 ふじみ衛生組合大会議室
- 3 委員出欠 出席14人
 - ・出席委員 荒木千恵子委員、今村ひろみ委員、大江宏委員（会長）、河本美代子委員、草苺正行委員、佐々木保英委員、佐藤俊夫委員、寺嶋均委員（副会長）、中澄子委員、増田雅則委員、松井和夫委員、藤生よし子委員、村越晴美委員、吉野伊佐三委員
- 4 出席者
 - 事務局 高畑智一、野中清、齋藤順計、深井恭、大木和彦、荻原正樹
 - 日本技術開発株式会社 坂田幸久、江藤秀二
 - パシフィックコンサルタンツ株式会社 笠井睦、宇田川学
- 5 傍聴者 18人

【議事次第】

- 1 開会
- 2 会長あいさつ
- 3 報告事項
 - 第6回市民検討会議事録の確認
- 4 議題
 - (1) 環境保全計画について（その3）
 - (2) 煙突高さについて（その3）
 - (3) 焼却炉の系列数について（その2）
 - (4) 施設配置について（その1）
 - (5) 調査計画書素案概要版について
- 5 その他

6 閉会

【配布資料】

議事次第

【資料1】 第6回 ふじみ新ごみ処理施設整備市民検討会 会議録（要旨）

【資料2】 環境保全計画について（その3）

【資料3】 煙突の高さについて（その3）

【資料4】 焼却炉の系列数について（その2）

【資料5】 施設配置について（その1）

【資料6】 調査計画書素案概要版

【会議録】

午後7時00分 開会

1 開会

【事務局挨拶】

【配布資料の確認】

2 会長あいさつ

【大江会長あいさつ】

3 報告事項

第6回市民検討会議事録の確認

会長 : 意見がないため、公開の手続に入らせていただく。

4 議題

(1) 環境保全計画について（その3）

【事務局説明・質疑応答】

- C委員 : 意見をまとめて書いているので、わかりやすく結構だと思うが、一番最後に「別途、地域住民を入れた場での検討が必要である」とあり、これは、いろいろ意見は出たが、結論は出ていない。だから、もう1回別の場で検討するととれるが、そういうことを言われているのか。
- 会長 : この検討会での意見をまとめたただけである。そういう意見が出たことを踏まえた上の4行に集約したと理解した。いろいろ出て議論した上で、こういう方向が1つの集約方向であろうと思う。
- L委員 : 調査計画書概要版を7月末か8月に都へ提出と説明があった。これは地域住民を入れた場での検討が必要であり、事務局も市民への説明会なども開くと返事をいただいているので、あまり急がないでほしい。
- 事務局 : この調査計画書を7月末から8月上旬に提出すると、10日間、公示・縦覧される。一般の市民の方が自由に見ることができるようになる。それに並行して、三鷹市内で2回、調布市内で2回、合計4回のこの調査計画書についての説明会を開催したいと思っている。この調査計画書について意見があれば、意見書という形で東京都に意見を提出することができる。その後のアセスの手続で言うと、約1年後に今度はアセスの評価書(案)ができ、それができた段階でまた公示・縦覧し、説明会を開き、意見をいただくことができる。これが最後の確定版ではない。
- D委員 : 環境保全計画そのものについて異論はないが、これに関連して不燃ごみ処理施設の悪臭問題について、ぜひ実情を報告して皆さんの批判を仰ぎたい。説明させていただけたらと思う。
- 会長 : 環境保全計画について整理した後に時間を取る。
- C委員 : 「地域住民を入れた場での検討」は、煙突の高さについてでも記載がある。そういう方向でやることを見越して方向性はこうしたとしたらどうか。要は、環境影響評価の整理の仕方全体にかかっており、委員会の全体の方向づけとして、どこかに入れたらどうか。
- B委員 : 「コスト面を含めて」という言葉が方向性の中に含まれて書いてある。こ

れは重々承知のことで、あえてここに強調するように書く必要があるか疑問を感じる。健康第一に最新の技術を用いて造ることを書いて、あとは総合的な視点から検討を行うだけでいいのではないか。

会長 : 異議がなければ、この「コスト面を含めて」は、総合的な視点に入っていることで取りたいと思う。

「地域住民を入れた場での検討」については代替案はあるか。

C委員 : 全体の方向性も後で作られると思う。その中に先ほどのいろいろな過程を記載していただければ、これはこのままで結構だと思う。

事務局 : まとめの方向性は、あくまでもこの環境影響評価調査計画書に盛り込む方向性であり、「地域住民を入れての検討が必要である」との文言については、検討会の全体の最終的なまとめの中に盛り込んでいきたい。

会長 : それでは、先ほどの不燃ごみ処理施設の悪臭問題についての説明の時間を取る。

D委員 : ここにある図は、第5回検討会資料のコピーであり、可燃ごみ処理施設の悪臭対策の図である。ごみの悪臭源をまず密閉した部屋で囲み、車の出入りに対してはエアカーテンをつける。中を負圧にし、その汚れた空気を吸い取って、焼却場で燃やして分解して煙突から出す。これに対して右の図は、問題の容り法不適合の汚れたプラスチックであるが、処理施設のイメージである。関連の写真を使っている。違いは、部屋が密閉されていない。車の出入りに対してもエアカーテンはついていない。汚れた空気は、吸い取ることもできず、周りに放散される。こういう状況にある。

ふじみ衛生組合不燃ごみ処理施設の現状は、容り法不適合の汚れたプラスチックの処理が密閉性不十分な状態で行われており、瓶や缶も屋外で処理されている。6年以上にわたって悪臭問題で近隣住民からの苦情が絶えていない。実は平成13年1月に近隣住民から、このにおいの問題を解決してほしいと要望した。それに対して回答は「検討する」であったが、6年後の今日現在、完全に対策がとられていない。不燃処理施設のこういう問

題は近隣の焼却場ではどうなっているか調べてみると、隣の多摩川衛生組合では、左の図のような施設でやっている。多摩ニュータウンの不燃処理施設も同様である。ふじみ衛生組合は、この事実を知っていたと思うが、住民の要望に対しては応えてくれなかった。

焼却施設がどんなに立派にでき上がっても、不燃処理施設がこのままでは住民の苦情はなくなる。しかし不燃ごみ処理施設の明確な方針や対応策は現在も明確になっていない。可燃処理施設と不燃処理施設は一体のものであると考えており、総合的な計画が示されない限り、住民としては安心できないと思っている。そのことも重ねて要望したが、それに対する明確な方針、対応は現在もない。

住民の間では、事業当事者であるふじみ衛生組合が、今後、可燃、不燃両施設について住民の要望を聞いていただけるかについて、正直不信感がある。可燃ごみ処理施設の悪臭対策の図はあくまで、絵にかいた餅であり、右の図が現実である。6年後にこうなるといっても、今の状態がこうだと、不信感は拭い切れないのが現実である。

先ほどの環境アセスメントであるが、これについての説明会は、多分、焼却場を中心にあると思う。どんな立派な説明をしていただいても、我々としては不燃施設も可燃施設も一体のものであるから、可燃施設がどうなるということだけではなくて、総合的にどうなるのかという計画を示していただきたい。

G委員 : 私もこの不燃ごみ処理施設については、今後どうするのかと可燃の検討をしながら常に頭にあった。今の意見は非常に痛切なこととして、不燃ごみの処理施設についても今後並行しながらやっていただきたいと思う。

事務局 : においに対する対策が不十分だという意見があり、法令上クリアしているが、住民の皆さんに対して不十分な面があったことも事実だと認識している。

私どもでは、不燃ごみ処理施設は、苦慮して最大限工夫しながら、埋め立

てゼロを維持しながら、努力して運営している。しかし苦情がなくならないということであり、今後の可燃ごみ処理施設も含めて、この問題については解決していかなければならないと認識している。

これまでの取組みは、エアカーテンを設置したり、消臭剤も散布しながら、においを極力除去する努力をしてきている。今後は、可燃ごみ処理施設の計画もあり、一体的にこれを解決していかなければならないと認識をしている。今やっている残渣の場所、瓶、缶も集約をしたいと考えており、19年度に造成費の予算を計上している。今どれだけの容積ができるかを研究しながら、造成費を最大限活用しながら広い面積をとりたいと思っている。リサイクルセンターの東側のオープンスペースの活用をしていきたいと思っている。一定の建屋を確保し、負圧をかけて、においを出さないような形で進めたいと思っている。全部収容し切れるかも含め、研究しており、オーバーフローする分は、外部委託も考えないといけないと考えている。

今後の不燃、可燃の両施設についての住民の要望であるが、今まさにこの市民検討会を通じても要望をお聞きし、既存の施設も改善を考えている。可燃施設は25年度の稼働を目指しているが、その前にしっかりとにおいの対策に心配がないように、最大限の努力をして20年度に向けて予算要望していきたいと考えている。

D委員：とりあえず、理解した。具体的なことは、ぜひ一緒に考えさせていただきたいと思う。

(2) 煙突高さについて（その3）

【事務局説明・質疑応答】

E委員：煙突の高さ100メートルは、ごみ市民会議の中でもいろいろ検討があった。要望であるが、今までの煙突は、ここが焼却場だと一目でわかるものであった。この施設では、煙突に対してデザインを含めて考えてもらいたいということが三鷹市ごみ市民会議の意向である。

K委員 : 私は、住民協議会の推薦で来ている。住民協議会では、60メートルに抑えられるなら、60メートルまでに抑えていただき、景観をよくしてもらいたいと考えている。煙突を見て潤いが持てるような形のものにしていただきたい。このエリアの人たちはそう望んでいる。

事務局 : 他の自治体へのアンケートの結果について報告する。調査対象の自治体は、関東圏及び近畿圏に位置し、施設規模が200トンから400トンのストーカ炉、そして1996年以降に竣工した施設を調査した。59メートルにした理由は、航空法による航空障害灯をつけたくなかったとの意見が多かった。一方、80メートルまたは100メートルにした自治体の意見は、排ガスの拡散効果が高いほうがよいということで決定した。また、住民の方の要望によるものといった意見があった。

D委員 : 煙突の高さは、100メートル以外は考えられない。確かに景観の問題があるため、このふじみ周辺の航空障害灯がついた建造物の写真を撮ってきたので配布する。

この写真は、私の家の2階から見える航空障害灯の写真である。1つはJRの鉄塔であり、もう一つは東電の鉄塔である。赤白の段柄であり、夜になると、障害灯がつく。これらの施設は、深大寺北町と南町の人間は大体毎晩見ている。三鷹市の中原からも見えるし、新川あたりからも十分に見える。これに対して住民は、クレームをつけたことがないことが事実である。その事実を確認するために、JRと東電に電話をして聞いている。

F委員 : 人間の安全、健康面を考えて、100メートル前後の煙突のほうがよい。景観の面から言えば、私自身は航空灯がついていても変だと思わない。

K委員 : 私は、この委員会で、安全でいいものを造りたいと考え、すすんで参加した。そのため、この施設は、本当にできてよかったと思えるものを造りたいと考えている。

この辺りは、静かなところであり、そこに威圧感のある煙突があったら、随分環境が違ってくる。健康に問題があれば100メートルにすべきであ

るが、その差がどうなのか。それほど差がないのなら、50メートルにして、周辺で生活している我々が見たときに、安らぎを持ってもらいたい。高いほうがいいとの意見もあるが、地元の我々はそう思っていない。根本にあるのは、ここにできて、近隣の人が泣くようなことのないようにとの思いが私の願いである。

会長 : 様々な資料を確認し、本日の方向づけになったかと思う。

H委員 : 私は、今まで学んできた中で高い100メートルを目指して建てたほうがよいと思っている。

先日、川口の環境センターに施設見学に行った。立派にでき上がっており、付近の建物や住んでいる町並みを頭に入れてきた。今もそれを絵的に姿を思いながら、この委員会に出ている。

私自身は、家から焼却施設が遠いため、気にしなかったが、間近に仰ぐように見る方の気持ちになれば、圧迫感として映ると思う。その感じ方は一概に言えないし、決められないものがあると思う。

F委員 : 高いほうがいいと言ったのは、高いほうが拡散率がいいということで発言した。景観については、あまり考えなかったが、安全な高さまでは持っていきたいというのが一番の願いである。

I委員 : 拡散の面から考えると、私も100メートルがいいと思うが、景観もあり、100%皆さんが納得することはあり得ないと思う。

L委員 : 拡散の度合いが大きかったことが印象に残っている。この東八道路の自動車が増えそうな感じがするので、広く拡散することからも、100メートルを希望する。しゃれた建物も含めて煙突もしゃれたものにしていただきたい。

G委員 : 同じ地元の方で、片や50メートル、片や100メートルと出たことに驚いた。地元の方は高いほうがいいと思い込んでいた。地元の方からしてみれば、100メートルはそんなに威圧感を感じることを改めて感じた。拡散というが、結局、出たものを広く広めるだけで、地球にとっては広がる

だけで、別になくなるわけではない。そこに疑問を感じる。

D委員 : 煙突から出るものは、ゼロにできない。できないときに、どういう負担をするのかだと思う。より広域で負担するとの問題で、煙突は高いほうがいいと思っている。

K委員 : 建設地がここに決まったのは仕方がないが、そのために犠牲になることはない。本当にいいものを造ってくれたという形にしたい。100メートルで、ゼロになるのなら我慢するが、50メートルと100メートルで、拡散の差がどのくらいあるのか。さしたる差でなければ、我々の圧迫感を大事にとってもらいたい。中原の施設は59メートルだが、今までどのくらいの影響が出ているのか。そこの市民が大変な思いをしているならば、100メートルでも仕方がないと思うが、そうでなかったら60メートル以下にってもらいたい。

会長 : いろいろデータが出て、私自身拡散の違いがあると感じた。その上で、本日のまとめの方向になっていると思う。

K委員 : 地域の人が犠牲になれということか。それも考えてもらいたい。

E委員 : 個人的に、新川の焼却場の問題で話をした方がいる。日によっては、臭いにおいが来るといふ。いろいろ話を聞いて、煙突は高いほうがいいから、検討会議の中で出してほしいという意見であった。

C委員 : これまでの資料を確認し、煙突の高さは高いほうが望ましいに賛成である。近隣の住民の意見も出てくるということで、この条件をつけることも賛成であり、このまとめでよいと思う。

参考のアンケート結果も、今の方向性を補足するデータになっていると思う。80から100メートル以上にした理由は、環境保全に関しての技術的な結果をベースに決められており、59メートル以下については、景観に配慮した結果となっている。先ほど航空障害灯を設置している施設では苦情はないとの報告もあった。

圧迫感との視点では、前回、イメージ写真が出され、あれを見る限りにお

いては、そんなに差はないと感じた。委員の皆さんも同様に感じたと思う。
私の意見としては、煙突は高いほうがよく、高い煙突の中でも圧迫感、景観については、配慮を検討していったらどうかと思う。

会長 : まとめていただいた。この議論は、ここで打ち切りとする。

(3) 焼却炉の系列数について (その2)

【事務局説明・質疑応答】

A委員 : ごみ量が減少した場合の対応で、「炉の運転調整により対応するものであり、差はない」と説明があるが、この運転調整とは具体的には何を意味するのか。

事務局 : 2系列にしても、3系列にしても、休炉があり、ごみがどんどん減った場合には、その休炉の時間を長くする対応になる。

D委員 : 多摩地区のほぼ全部の焼却炉について調査した。その結果、2炉運転しているのは極めて少ない。2炉運転をしているのは、国分寺、日野、昭島であり、これらの特徴は、人口が極めて少ない。ごみのトータルの焼却量は220トンもあるが、200トン以下である。ふじみ衛生組合での300トン規模の焼却炉では、2炉運転はない。例外として多摩ニュータウンがあるが、ここは、もともと3炉計画であったが、人口流入がストップし、2炉になっているだけである。

本日の資料の中で、2系列運転が25自治体あって、3炉は11自治体となっている。八王子も挙げられているが、ここは、1系列が2カ所、3系列が1カ所あり、合わせて5つある。この5系列を有機的に一元管理していると聞いている。また、東京都23区も同様に、これが2系列運転というのは、おかしいまとめ方だと思う。ここでは、同自治体内に他施設がないもののみを取り上げるべきであり、該当するのは、沼津、富士、那覇といった都市である。これはさっき申したように、非常に人口の少ないところである。

15ページの2行目に、3系列とした場合は、新ごみ処理施設の建設面積

が大きくなるため、マテリアルリサイクル施設の用地が小さくなり、マテリアルリサイクル施設の処理対象物の一部を別の場所で処理しなければならないから2系列が望ましいとの記載があるが、これは本末転倒の議論であり、これは適地選定を間違えたとは別の言葉で言っているにすぎない。適地選定をやり直すのが文脈として正しいと思う。

3系列にすると2系列に比べてお金がかかることはご指摘のとおりであるが、多摩地区においても、全国規模で見ても大きなところは3系列運転をしている事実があれば、それは何でもかを考えないといけなないと思う。私なりに考えてみると、ごみ焼却炉は、煙と灰と蒸気をつくり出すプラントだと考えると、製品が煙と蒸気と灰になる。一番重要なのは煙である。一度外に出るとリコールができないため、製品として見た場合の要求品質が非常に厳しい。だから、基本方針として環境と安全に徹底的に配慮する方針が生まれたと理解している。2番目は蒸気だが、これは製品価値として安定性が一番大事である。例えばきょう100もらって、明日ゼロは困る。きょうも明日も50ずつもらわないといけなない。灰は別なので除くが、こういった要求品質を満足するには立ち下げと立ち上げの回数を極力ダウンすることが必要である。2系列の場合は法定点検の7日間のほか、その他に3回とめる。これはごみピットの残量から考えるとそうなると思う。3系列の場合は、法定点検以外に2回ほど止めているが、私は、こんなに止める必要はないと思う。ごみ量から考えると、1系列を動かす必要はなく、3炉運転の場合は法定点検の1回は仕方ないとしても、あと1回止めればいいと思う。そうすると評価は、操炉の安定性は3系列が望ましく、この操炉の安定こそが安全性や環境性に配慮されるはずであり、これらも差がついて当たり前だと思う。

お金の問題は、2炉のほうが有利だと思う。設置スペースもそうかもしれない。しかし炉の耐久性は、「操炉条件が同一の上では」という条件つきで同じだというのが、操炉条件が違うから、これは3炉が優れているはずであ

る。ごみが少なくなったときも3炉が有利なはずである。もし200トンになったら、2炉運転を続けていけばいいので、これは圧倒的に3炉のほうが優れている。この星取表は問題を感じる。

問題はお金であり、資料によると、40億円の費用が余計にかかるとあったが、これは20年間の費用であり、年間に直すと2億円である。調布のごみ処理費用を考えると、今までは年間40億円使ってきた。最近は、広域処理を受けるので50億円になっている。50億に対する1億増は2%増であり、安全・安心のためには我慢してほしい金額と思う。別の見方をすると、調布市21万人でこの1億円を割ると、500円弱であり、3炉運転による安全・安心が得られるならば、ぜひお願いしたい負担であると思う。

以上が、3炉がいいと思う意見である。

事務局 : 私たちも、基本方針に上げているとおり、環境と安全に徹底して配慮したものでなければならないと考えている。そして、やるなら、我が家を建設する以上の気迫と情熱を持ってこれを組み立てる意気込みである。この気持ちでこの資料を組み立ててきて、2炉がボトムアップされてきたことを理解してほしい。2炉がだめ、3炉がだめという議論では決してなく、それぞれのメリット、デメリットをどう受けとめるかが議論になると思う。最後には、公務員の基本として、最小の経費で最大の効果を上げるという気持ちの中で比較をしたものである。

冒頭の文章は、本末転倒の文章ではないかと言われた。3炉と2炉を比較したとき、3炉のほうが幅をとる。スリムに建てられるものであれば、今後の全体的な用地の利活用を考え、最大限の努力をして残すべきという視点に立ったものである。そのように理解してほしい。

事務局 : 全国では圧倒的に3炉が多いというご指摘があったが、そのとおりである。ただ、以前は、3炉あって1炉は、予備炉的な考え方があった。今現在では、その考え方ではなく、なるべく効率的な焼却炉を造ろうという時代で

あると考えている。

私どもも、同じように環境と安全に徹底的に配慮する視点は変わらない。

2 炉、3 炉どちらが環境と安全によいかであるが、これは、公害防止基準や煙突の高さが非常に重要な視点だと考える。3 炉の場合には操炉を工夫することによって年間の炉を止める回数を減らすことができるとの意見があったが、確かにそのとおりかもしれない。ただ、それは2 炉でも言えることであり、操炉計画を工夫することによって炉の止める回数を減らすことは可能であると考えている。そういった点からも、環境と安全の視点という点では変わらないと考える。逆に、排ガスの量は2 炉よりも3 炉のほうが多いが、細かな視点では甲乙つけがたく、それよりも煙突出口での公害防止基準を厳しくする、煙突を高くすることによって環境と安全は2 炉の場合でも、3 炉の場合でも徹底的に配慮したいと考えている。

副会長 : 経済性の視点も大事だと考える。

2 系列でマイナスは操炉の安定性である。この操炉の安定性には、2 つあると思う。1 点は、性能の安定性であり、この点では2 炉も3 炉も動いている限り変わりは全くない。2 点目は、安定した能力の維持であり、2 炉のほうが、1 炉故障すれば半分の能力になってしまう。これで困るのは運営側の組合であるが、ピットを大きくするとか、どうしてもものときには多摩地区の相互援助で対応するとのことであり、無理にお金をたくさんかけなくてもよいという言い方も、判断の仕方としてあると思う。

20 年で40 億円ということであるが、これから造る施設は、うまくメンテナンスをやっていけば40 年ぐらいいもたせることは可能だと思う。そうすると、もっと開きが出てくる。安定した性能という点では2 炉も3 炉も変わらないので、この経済的な観点も考え、節約できるところはやったほうがよいという観点である。

C 委員 : 2 炉か3 炉か議論する上での論点は、炉が止まった場合、市民がどういう迷惑をするかをまず考えなければいけない。結局、工場が止まって、ごみ

が処理できないときに、町の中にごみがあふれることが一番恐れることである。それに対してどういうバックアップを考えているかが全然見えていない。もう一つは、多摩地区の組合との相互援助の関係があるとのことだが、これは何か協約があるのか。

事務局 : リスク管理は万全を期していると思っている。1つのリスク管理としては、今回、選んだ焼却炉が40年以上歴史のあるストーカ炉であり、一番故障が少ない炉を選んでいる。現在、動いている三鷹市環境センターでも、稼働後20年以上たっているが、大きな故障はない。

2つ目は、ピットを大きめに掘っておくことがある。資料では、柳泉園組合を参考に、2,300トンのピットを掘った場合を想定しているが、ピットがいっぱいになることはなく、少なく見ても36日間は止めることができる。通常の点検、補修は1週間、長くて2週間程度で十分終わる。この36日間があれば、通常の点検、補修は十分たえられると思う。1カ月や2カ月で直すことができないような大トラブルが仮にあったとしても、この多摩地域の中でお互いに助け合うとのことで、広域支援体制が組まれている。これは要綱がある。年度の初めに1年間の各自治体の焼却炉の操炉計画を提出する。それでどの自治体は何月頃に炉を止めるかわかり、互いに止めている時期に、どうしてもあふれるようなことがあれば、その時期はお互いにやりとりするとなっている。現在でも三鷹の場合、炉の点検時に、武蔵野市へごみを一時お願いしており、逆に武蔵野市が炉の点検をするときには三鷹市に持ってくることも行っている。そういった二重、三重のリスク管理をしている。

B委員 : この焼却炉の問題は、ごみについてどう考えるかという基本的な考え方に、関わってくると思う。私は調布ごみ市民会議をやっており、立場として、ごみをつくらない、燃やさない、循環させることを目標にしている。地球温暖化も大変問題になっており、ごみの問題について皆が注目していると思う。

ごみは、7割が紙と生ごみであるが、生ごみのリサイクルは、進歩が激しく、大変安い値段でも処理する方法がいろいろある。そこから考えた場合、3炉つくれば1炉を完全停止することもできると考えると、3炉でやっていくほうが望ましいと思う。

事務局 : 確かに、生ごみを分別し、焼却炉に入れられない時代が来るかもしれない。そうなった場合、可燃ごみの半分以上は生ごみであり、150トンにも満たないこととなる。もし極端にそこまで減るのであれば、150トンで1炉運転で済むということも十分考えられる。200トンに減れば3炉のほうがいいかもしれないし、これはごみの減り具合によると思う。

B委員 : それを目標に考えていくことが基本だと思う。

副会長 : リサイクルの問題は、両市は、非常に一生懸命取り組んでいると思う。実は、リサイクルを徹底してやればごみは出ないという人も多いが、リサイクルを一生懸命やっても、品物が劣化していくため、どうしても最後はごみになって出てくる。ごみになって出てくる時間を延ばすことが、リサイクルの効果として1つある。もちろん減量化の運動が大切だと思うが、リサイクルを何回かすると質が低下し、どうしてもごみになって出てこざるを得ない。それをきちんと安定して処理する施設をこれから建てようということだと思う。

3炉になると、その分、沢山の機械が増える。機械は、ある程度動かしておいたほうがいいものもあり、止めておくと腐食が進行する場合もある。機械の数が多いのには、それだけ手間暇と補修費、運転費も余計かかる。ごみが少なくなったら、1炉休んでいる時間が今までの予定よりも長くなるかもしれない。だけど、1炉は必ず動いている。ある時期が来たらまた点検して、今まで止まっていた炉を動かす形となる。2炉でもごみが減ったからといって、困ることはないと思う。3炉の場合、長く機械を動かさずに置いておくと、それはそれで問題があるし、それだけ手間暇、コストというのがかかってくる。そんなことを考えると、2炉でよいと経験から思

う。

A委員 : 先ほどの炉の安定性を考えると、立ち上げ、立ち下げの回数は減らしたほうがメリットがあると思う。炉の容量でみると、小さい炉の場合、ごみを安定して燃やす部分で容量が大きいものに比べると、きめ細かに制御しないといけないと思う。実績のあるストーカ炉ということ、運転に関しては、計画されたとおりに運転されているかを市民も参加して見ていくことも含めて、2炉でいいと個人的には思う。

G委員 : 私は2炉に賛成である。以前、焼却炉が非常に多過ぎてあちこちで余っていると聞いたことがある。広域支援など、いろいろなことで互いにカバーし合うシステムができているから、あちこちに沢山造るのも、もったいないと思った。

それと同時に、リサイクルの話があったが、私はリサイクルは非常にお金がかかるから、リサイクルよりも、ごみを出さないほうを重点にしている。現実、生ごみを出さない運動を広めている。消滅型の生ごみ処理機を広めており、家庭の中でもにおわないし、量も増えないしということで、みんな非常に愛用している。一方では堆肥が欲しい方は堆肥ができるような、助剤を広めている。生ごみを出さなければ、かなりごみも減ると思う。

F委員 : 私は3炉のほうが安全だと思う。新しくここに造るときには、他所のものを受け入れても処理してあげられるだけの容量を持っていて安心して使えて、経済的にも効率のあるものを造る必要があると思う。一番安全を期するという点では3炉のほうが現実合っていると思う。

副会長 : 安全をどう捕らえるかであるが、炉数が多く機械の数が多くなると、それだけ故障する頻度は高くなる。機械物は、どうしても故障する。そういう点から言うと、安定した稼働は、統計上2炉のほうが有利となる。先ほど1炉あたりの容量の意見があったが、一番的を突いた意見だと思う。2炉の場合は150トンであり、3系列だと100トンとなる。大きい炉のほうが炉の中への安定した供給ができ、安定して燃えてくれる。そういう点

からも、ダイオキシン等を含めて公害物質の排出量が抑制できると思う。それから、3炉の場合と2炉の場合、3炉の方が停止回数が増える。炉を稼働させたり、停止したりするときに燃焼状態は不安定になる可能性がある。3炉の方が、炉を立ち上げたり、立ち下げたりする回数が多いだけ、余分に排出するリスクが考えられる。ここのあたりが環境的な面から見た2炉と3炉の違いだと思う。

L委員 : 私は3炉の意見を持っている。大きいほうが安定した燃焼ができると言われていたが、小さいほうが管理しやすいし、安定した燃やし方ができている。故障も、小さいほうが少なくて、結果的には手当てしなければいけない数も減ると思う。それと、多摩地域の多くが3炉を採用しており、そこにはメリットがあると思っている。

K委員 : いままでの話を聞いて、2炉がいいと感じた。経済的な面も考えなければいけないと思う。

J委員 : 私も、皆さんの話の中で2炉がいいと思う。安定に炉を動かせるのは、小さい炉より、ある程度の大きさを持ったほうであることが実証されているという話があり、また万が一、ごみが処理できなければ、ストックヤードを大きくする・広域支援があるという話であり、十分2炉で安定した処理ができると思う。

C委員 : 私も2炉と思っていた。

先ほどから出ている三多摩地区で3炉が多い理由がはっきりわかっていないので結論を出しかねていた。先ほど広域の支援体制の話があったが、説明では、2週間程度の定期点検用のごみ回しということであった。心配しているのは、その炉が完全におかしくなって止まったときであり、処理を依頼するごみの量が全然違ってくる。だから、大都市では3炉が多いと理由づけができると解釈した。今の支援体制の中で、その辺の対策をはっきりうたっておけばいいと思う。支援体制の条文の中の量的な取り決めがあるかどうかを確認していただければ2炉でもいいと思う。

これからプラントメーカーを決めていくが、操業に関する稼働率の保証問題等もいずれ議論になってくると思う。そういう条件も含めてであれば2炉でいい。

B委員 : 関連で聞きたい。広域支援体制であるが、ある程度値段の上乗せがある。調布では、10億円のプラスアルファのお金がかかっている。その辺のことも関連してお聞きしたい。

事務局 : 多摩地域にはごみ処理広域支援体制がある。二枚橋の問題があり、そのときは、皆で集まって最大限第2ブロック内で引き受けるとなり、オーバーフローする分は第1、第3ブロックにお願い、三多摩全体で支えるということであった。その結果、調布のごみは多摩ニュータウンに行き、府中のごみは多摩川衛生組合に行き、小金井は国分寺とやるとなった。今後、操炉の関係でいろいろな部分で大規模改修や建てかえが起きてくることも事実であり、東京都とも一緒になって三多摩の広域支援体制の強化について、その緒についているところである。

以前は、廃棄物の処理の補助金については、予備炉も含めた余裕を持った炉ができた時代であった。しかし、資源循環型社会推進交付金となってからは、徹底的に循環させ、燃やすものを少なくし、炉も適正な量に合ったものを造ることになっている。

D委員 : 3炉は2炉の予備であるとの説明があったが、絶対違うと思う。今の議論は3系列で運転することと2系列で運転することであって、2系列の予備炉が3炉目だということではない。

先ほどの意見で、2炉のほうがより安定するのは、信じられない。次回に、運転計画を実際に組んだらどうなるかを示していただきたい。例えば90%燃やせるか、110%燃やせるかによって運転計画は変わってくると思う。出てくるエネルギーをみても、燃焼の安定性をみても3炉案を推薦している。安定したエネルギーが得られるならば、それは結局、環境にやさしいということになると思う。

より安定で燃やせる具体的なランニングデータで示していただかないと、結論が出ないと思う。

副会長 : 今の質問に関して、定性的な説明になるが、ストーカ式の焼却炉を想定した場合に、焼却能力が大きな焼却炉は、焼却炉の幅が比例して大きくなる。そこに150トンと100トンのごみが入った状態で燃焼することになる。各家庭から出るごみは、性状がばらばらであるが、それを1時間半から2時間ぐらいかけて、燃焼することになる。その場合、小型炉のほうがごみ質の性状のばらつきの影響が出やすい傾向がある。炉の中の燃焼状態が暴れると、蒸気の発生量などの暴れにもつながっていく。

全体的に焼却炉の運転、安定した維持管理の点では、大型炉のほうが有利と考えられると思う。

D委員 : もう一点。多摩地区では、なぜ3基が多いのか。多いのは予備炉という考え方だけか。

事務局 : アンケートの結果では、補修時等に処理能力の低下をなるべく招かないようにするためということである。3炉のほうがより長期間にわたって炉を止めることができる視点を重要視したと思う。

E委員 : 結論的には、2炉に賛成したいと思う。効率的、安定性の面から言っても賛成できると思う。

1つ質問する。次世代型のストーカ炉を今度設置すると思うが、例えば空気比の低減がどのぐらいになるのか。また、純酸素吹き込みも含めて排ガス量の低減は、どのぐらいになるのか。

事務局 : その辺については、データを持っていない。今後また議論をさせていただきたいと思う。

会長 : 炉系列数については、2系列のほうに賛同する声が多かったと思う。

15ページの星取表自体が定性数値にあらわせないものがあるので、必ずしもこれによって判断はできないが、事務局の土地の有効利用も含めてやっていきたいとの意見は、大事な視点と考える。

(4) 施設配置について（その1）

【事務局説明・質疑は次回に持ち越し】

(5) 調査計画書素案概要版について

【事務局説明・質疑は次回に持ち越し】

5 その他

次回日程について

会長　　：　次回は、平成19年7月13日（金）に実施する。

第9回検討会は、平成19年7月30日（月）に実施する。

6 閉会

午後9時30分散会